



講演する小林教授

エコツーリズムで 景観保全と経済の両立へ

東海大客員教授
小林氏が講演

南阿蘇村の石垣は「お宝」

熊本地名研究会の9月例会は20日、熊本市のパレアで開き、「南阿蘇の石垣文化とエコツーリズム」と題して、東海大学文理融合学部客員教授の小林寛子氏が講演した。小林氏は九州大学のチームが調査し、その規模と多様さが明らかにされた南阿蘇村の石垣について説明した後、その保存と活用を通じて地域を豊かにするエコツーリズムの考え方、さらに今後の方向性について、氏の経験を交えながら話した。講

話のあと質疑応答を行い例会を終えた。この日の出席者は15人だった。
小林氏の講演要旨は次の通り。【報告者・藤野】

九大による石垣調査

私は2013年に東海大に観光ビジネス学科が出来たときに熊本にやってきた。以前、エコツーリズム先進国のオーストラリアでエコリゾートを開発する仕事に従事したのがきっかけとなり、エコツーリズムの研究に携わり、私の専門となった。本日話す南阿蘇村は石の付く地名が多いそうだが、なぜなのか根拠はよくわからない。今回、熊本地名研究会からお話があったことで、地域の魅力を体験するエコツアーに地名のいわれを絡めることも面白いと思った。

南阿蘇村でエコツーリズムに関わるようになったのは、九州大学の調査で初めて

解体のあと再び積まれた川後田の石垣



石垣群の存在とその価値が明らかになり、この価値をどう共有し次世代に繋いでいくかという課題解決のために、お話をいただいたのがきっかけだった。

九大の調査は、南阿蘇村の全集落にある現存する石積みを対象に、21年度から23年度まで行われた。内容は、分布状況の把握、寸法と石積み形式などの把握、岩石の種類、古老へのヒアリングで、総数は5千件以上、石垣の総延長は120km以上に及んでいる。このうち、同村川後田では石垣を詳しく知るための分解調査もあった。村に石垣が多い理由は、V字谷斜面に広がる農地や集落を守る必要性があったのと、これらを作る際に出土した岩石をそのまま材料として活用している点だ。身近にある石を使って活用するので、場所によって石の質も違うし積み方も異なっている。今風に言えばSDGsにかなっており、環境に優しいやり方だ。

石の種類としては、外輪山由来の石、白

川で採れた丸い玉石、中央火口丘の火山性の石ありと、多様性に富んでいるのが特徴だ。集落別に見てみると、白川水源がある白川は中岳噴火によるごつごつした安山岩、旧久木野村側の岸野は川から採取した丸い石と外輪山の角ばった石のミックス、池の川水源付近の赤池は溶岩流の石、白川沿いの祇園は玉石、長陽駅近くの川後田は烏帽子岳由来の安山岩といった具合だ。それぞれ地域の人が独自に積んできた様々な石垣があるのは全国的にも珍しいとのことだ。ただ、このように先人が残してくれた宝物のような石垣群も、少しずつ失われている。

特に熊本地震や大雨で崩れた後に、コンクリートで修復されている。このため知恵

(2ページに続く)

地名研究会 告知板

11月 行事日程

❖全国地名研究者大会

「アイヌ語地名から探る暮らしと文化」

11月15日(土)・16日(日)

岩手県遠野市

❖勉強会 テキスト「地名の研究」柳田國男著

11月8日(土) 午後1時30分～

パレア会議室5

*地名研ブログでも
会の活動や関連
ニュースを発信中

